

そ の 他

臨床工学技士の手術直接介助業務・手術室業務導入の有用性

多根総合病院 医療技術部 臨床工学部門

福田海人 田川晋之祐 前田佳希 神野竜治
高橋尚基

要 旨

当院の臨床工学技士（以下、ME）は、心臓カテーテル業務、ペースメーカー業務、人工呼吸器の保守点検やラウンド、血液浄化業務、輸液・シリンジポンプ等、器械の点検を主な業務としていた。しかし2014年、看護部業務の見直しに伴って、MEが手術直接介助と手術室機器の保守点検・トラブル・修理対応などを的確に行うことを目的に手術室業務も始めることとなった。まず、2014年2名のMEを手術室業務に導入することから始まり、2015年は3名のMEでローテーションを組み、内2名が手術室業務、2016年は6名のMEでローテーションを組み、内2名が手術室業務を行なった。その結果として、MEが手術室業務に介入することは、手術室での有用な人材活用に寄与し、MEの業務の領域が広がったと考えられる。

Key words：臨床工学技士；早期診断；手術直接介助

はじめに

ME本来の業務である生命維持管理装置の操作・保守だけではなく、手術室看護師の絶対数不足による看護業務見直しと、手術室医療機器の高度化が進んでいることなどから、MEの業務内容拡大が行われ、2014年度からMEが手術室業務を開始することになった。

手術直接介助をするにあたっては、主任・中堅看護師が教育担当となり、短期滞在手術（以下、DS）症例から訓練して、手術直接介助を行うこと、また、間接的介助についても法的な制限を逸脱しない範囲で介助を行うこととなった。

教育担当看護師の指導のもと、DS症例（鼠径ヘルニア・肛門疾患・下肢静脈瘤・腹腔鏡下胆嚢摘出手術他）を中心に手術直接介助に入り、技術の向上を図るとともに、その疾患の知識の向上、また、手術看護の理解の向上を志し研修を行った。

結 果

1. MEの全手術直接介助件数

2014年2名のMEから手術室業務導入が始まり、

同年2014年は全手術件数の16%（直接介助601件/全手術3811件）（図1-1）、2015年3名でローテーションを組み、全手術件数の27%（1014/3689）（図1-2）、2016年には6名でローテーションを組み、全手術件数の30%（1142/3855）（図1-3）の手術直接介助を行った。

また、全手術直接介助件数のうち、DS症例（外科）の件数もここに記載する。（図2-1）、（図2-2）、（図2-3）

2. 手術室でのME業務

手術室には大小様々な医療機器があり、その機器の使用方法を熟知していないと、適切に使用することや、点検が困難である。そこで、私たちMEが使用方法の勉強会やマニュアルを作成し、看護師全体への周知にあたっている。

また、使用前点検や使用后点検をすることによって機器の異常を早期に発見し、必要時には業者に連絡し代替器の手配を行うことにより、円滑かつ安全に手術が行えるように努めている。

ま と め

2017年現在の手術直接介助業務では、DS症例・消

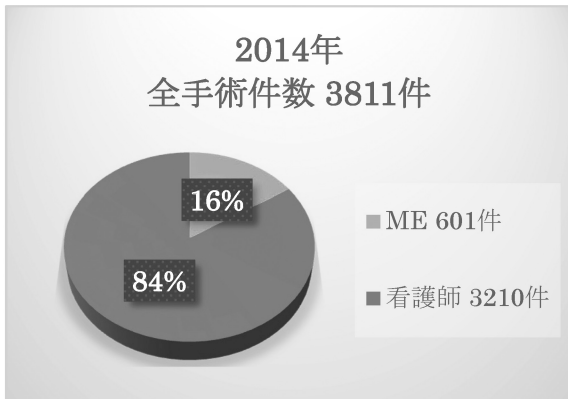


図 1-1

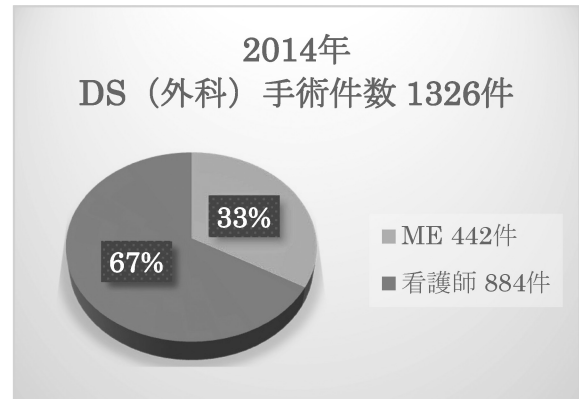


図 2-1

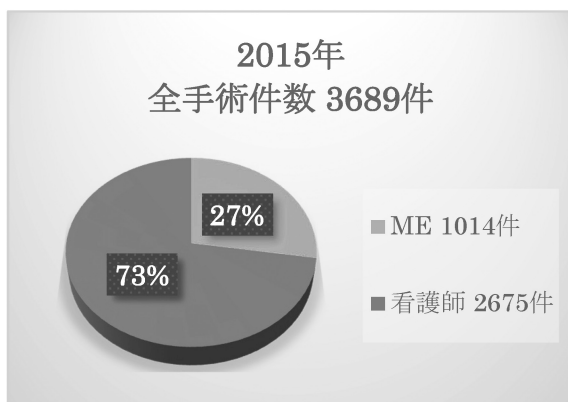


図 1-2

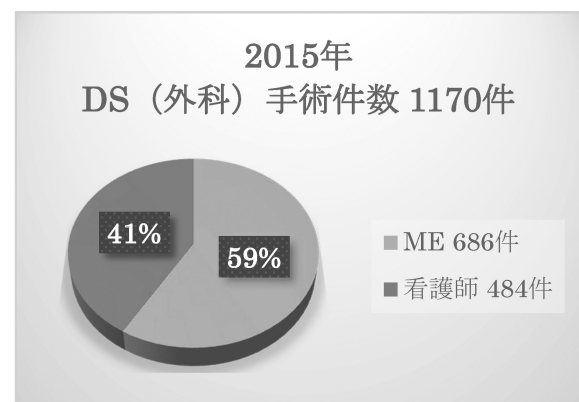


図 2-2

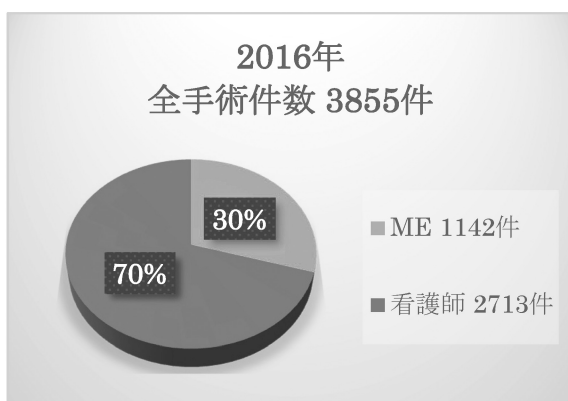


図 1-3

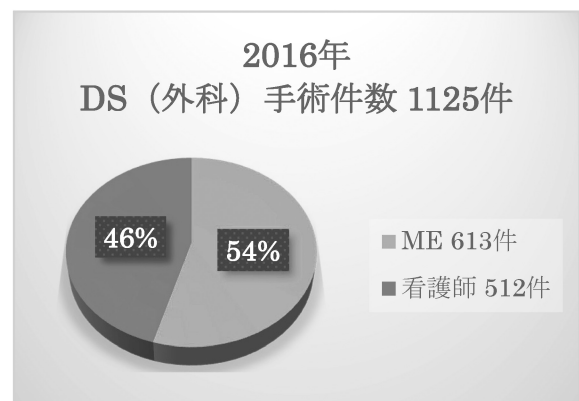


図 2-3

化器外科・形成外科・泌尿器科・脊椎内視鏡手術の直接介助を行っており、手術直接介助の対応症例が広がるとともに件数も年々増加している。

ME が手術室業務をすることによって、機器の異常やトラブル対応が早期発見・対応できるようになった。また、ME が手術直接介助をすることで、手術で

使用される機器の状況を把握することができ、その機器の使用頻度や用途に合った点検ができるようになった。

看護師と業務分担・協力することで、看護師が看護業務に専念する時間が増加し、さらに有給消化も可能になった。

考 察

教育担当看護師により手術直接介助業務の教育を行ってきたが、今後はますます高度な手術機器の導入により、機器の取り扱いが難しくなると思われる。そのため、機器のマニュアル作成はもちろん、現場に即した独自の教育方法を構築していく必要がある。

今後も看護師との連携を密に手術業務を行うことはもちろんだが、ME内でも連携を強め情報を共有し、手術室業務を円滑かつ安全に行うことで患者によりよい医療を提供しなければならない。

おわりに

MEが新たに手術室業務に進出することで、有用な人材活用に寄与し、MEの仕事の領域が広がり、また、互いに協力・補助しながら患者に向かい合うことで、チーム医療の意識が向上したと考える。

参 考

吉岡淳志：当院における臨床工学技士と看護師の協働について. 十全病誌, 17 (1) : 12-13, 2011

